

## 17) キンセンカ＝金盞花

キンセンカはキク科の一年草または越年草で、原産地は南ヨーロッパである。草丈は20～50cmほどになり、茎は全体が軟毛で覆われ、よく分枝して各々の茎頂に花径5～7cmほどの頭花を一輪ずつつける。葉は長さ10～12cmほどの細長いへら形で、やや多肉質でやわらかく臭気がある。和名の由来は中国名を借用したもので、花の形を金色の盞(サカズキ)にたとえたものである。別称としては花期が長いためにチョウシュンカ(長春花)とか、トキシラズ(時知らず)などといわれている。学名は『*Calendula officinalis*』で、属名はラテン語で一ヶ月を意味しており、これも花期が長いために名付けられたのだろう。また種小辞は薬用のという意味である。イギリスでは『marigold』、中国では『金盞花』である。

キンセンカは現在ではほとんどが鑑賞用として栽培されているが、かつては香りを楽しむハーブとしての色彩が強かった。トウキンセンカ(唐金盞花)とホンキンセンカがあり、ホンキンセンカは中近東の原産で花は小さく別種である。日本で改良され、栽培されているのは前者のトウキンセンカの方である。

キンセンカが日本に渡来したのは意外と遅く、幕末の嘉永年間(1848～1853年)のことで中国を経て伝わった。しかしこれはトウキンセンカで、ホンキンセンカはもっとずっと以前の10世紀初め頃、やはり中国を経由して渡来したらしく、源順によって925年に編纂された『和名類聚鈔』(ワミョウルイジュショウ)には『金盞花』(コンセンカ)として記されている。室町時代になると『仙伝抄』(センデンショウ)や『池坊専応口伝』(イケノボウセンオウクデン)などの家伝書には、生け花の素材として記されており、この頃にはかなり栽培もされていたものと思われる。しかしその後こちらの方は日本に定着することなく、今ではほとんど見ることはできない。キンセンカは花持ちが良いために、日本ではもっぱら仏花としての印象が強いが、ヨーロッパでは高価なサフランの代用として、調味料やバター、チーズなどに色みをつけるために、またスープに浮かべて香りを楽しむために広く用いられ、花は樽に詰めて売られていた。中世ヨーロッパでは生の葉をケガや虫刺されに外用し、花は黄疸、胃腸病、虫下しなどの民間薬として用いられた。

ギリシャ神話では、美少年が太陽神『アポロン』に憧れたことを妬んだ雲の神が、太陽を8日間も隠してしまった。悲嘆にくれた少年はこのために死んでしまうが、これを知った『アポロン』は少年をキンセンカに変えて、この世に蘇らせたという。このためにキンセンカは太陽の上る朝に花を開き、夕方には閉じてしまうのだという。かのシェークスピアも『冬物語』のなかで、キンセンカを「太陽とともに眠りにつき、太陽とともに起き出す花」として表現している。

キンセンカは日本で改良され、大輪の花をつけるものやオレンジ色の他、黄色のものや冬咲きのものなど、数多くの品種が栽培されている。



ギリシャ神話では太陽神アポロンにあこがれた美少年の化身とされているが、どこことなく太陽のような花であるところから、そんな神話が生まれたのだろう(埼玉県東松山市)。



一面に咲いたキンセンカの花、花期が長いのが特徴でもある(埼玉県東松山市)。





キンセンカには黄色の花を咲かせるものと、オレンジ色の花を咲かせるものがある。ヨーロッパではどちらもバターやチーズを着色するために用いられた(埼玉県東松山市)。



日本ではキンセンカは、お墓参りや仏壇用としての利用が多い(埼玉県東松山市)。

[目次に戻る](#)